

菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（十二）——

焼山廣志

一

前回^①に引き続き、本稿では以下の『菅家後集』の作品の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』「497問種菊」の一首を取り挙げてみる。

注釈を進める上での「凡例」は前稿^②のそれに倣う。

二

本文

平仄

497
種菊^{*}

・青膚小葉白牙根 ○○○●●○○○
 ・茅屋前頭近逼軒 ○●○○○●●◎
 ・將布貿夾孀婦宅 ○●●○○○●●

校異

・與書要得老僧園 ○○○●●○○○
 ・未^{*}曾種處思元亮 ○●●●●○○○
 ・為是花時供世尊 ●●○○○●●◎
 ・不計悲愁何日死 ●●○○○●●●
 ・堆沙作壘荻編垣 ○○○●●○○○

*脚韻は上平声「元韻」韻字は「根・軒・園・尊・垣」である。

○題字下注「七言」…（内閣）（大島）（松平）（尊四）（太二）
 刊本 全本

▼頭注「扶十五」…（内閣）（松平）（尊四）
 ▼頭注「無七言二字」…（大島）

○貿…貨（●）（静嘉）（尊一）（尊二）
 ▼頭注「貨作貸」…（大島）

○未…非（○）…（大島）（太二）（太二）
 ▼頭注「非作未」…（大島）
 刊本 全本

訓読

- ・青膚 小葉 白牙の根
- ・茅屋 前頭 近く軒に逼る
- ・布を將て買ひ来る 孀婦の宅
- ・書を與へて要め得たり 老僧の園
- ・未だ會つて 種うる處、元亮を思はず
- ・是れ 花の時 世尊に供せんが為なり
- ・計らず、悲愁 何れの日か死なんことを
- ・沙を堆し 壇を作りて 荻 垣を編む

通釈

- ・表面の青々とした小葉をつけ、まっ白な根をつけた菊を
- ・家の前の、軒にかかるすれすれの所に植えた。
- ・これは布とひきかえに、やもめの所に出掛け手に入れたものであるし
- ・手紙を書いて、老僧の所でもらってきた菊の苗なのである。
- ・このように菊を植えようとしている私は、今まで一度も陶淵明のことなど考えることなく（殊更、陶淵明を意識したからではなく）

・ひとえに、これは菊の開花する秋ともなれば、この花で、仏壇に供えたいと思うからに他ならない。

・悲しみ憂える日々の毎日、いつまで自分が生き永らえるかわからない中で
・菊の苗を植えた園りを砂地で高く盛り、荻の枯枝を編んで、垣根の替わりにしたのである。

語釈

○青膚：緑の樹皮や、こけ、苔鮮の意としての例が多いが、ここでは「種菊」の苗の緑の葉のことを指す。『漢語大詞典』には「①青色的樹皮」と説明し、「韓愈」の「孟郊、城南聯句」の「緑髮抽琅玕、青膚聳瑤楨、錢仲聯集釈引孫汝听曰青膚、青皮也」の用例を索く。

○白牙：『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』で小島憲之、山本登朗氏は、この詩の注釈で「『茅』に同じ。『白牙』は差し芽をした茎から、白い芽のように伸び始めている菊の毛根を言う」と説明されている。（二五九頁）

補説

○茅屋：①かやぶきの家。茅宇。茆屋。質素をあらわす語。②己の家の謙称。茅舍。拙宅の意があるが、ここでは①

の意。太宰府の今住む宿舍を言う。『漢語大詞典』には「亦作『茆屋』用茅草蓋の房屋」と説明し、次の用例を索く。

〔左傳〕桓公二年「清廟茅屋、大路越席、杜預注、以茅飾屋、著儉也。」

〔杜甫〕「春日江村」詩之二「茅屋還堪賦、桃源自可尋。」
〔姚合〕「將歸山」詩「聞道舊溪茆屋畔、春風新上數枝藤。」

〔漢書〕・藝文志「茅屋采椽、是以貴儉。顏師古注：以茅覆屋、以采為椽、言其質素也。」

〔白氏文集〕「088題王處士郊屋」に「負郭田園八九頃、向陽茅屋兩三間」の用例が、「352洗竹」に「小者截魚竿、大者編茅屋」の用例が見える。紀長谷雄の「4山家秋歌（越調）」に「秋水冷 暮山清 三間茅屋送殘生」の句が見える。『菅家文章』「211路遇白頭翁」に「三間茅屋南山下、不農不商雲霧中」の句が、「292苦日長」に「茅屋獨眠居、蕪庭閑嘯立」の句が、「321閑居」に「茅屋三間竹數竿、便宜依水此生安」の句が、「507風雨」に「不愁茅屋破、偏借菊花殘」の句が見える。

○前頭…まえ。先。『漢語大詞典』では「②面前、跟前」と説明する。

〔白氏文集〕「對酒勸令公開春遊宴詩」に「前頭更有忘

憂日、向上應無快活人」の句が見える。「元稹」の「和李校書新題樂府、西涼伎」に「哥舒開府高宴、八珍九醞當前頭」の句が見える。

○近逼軒…『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』の注釈に、「庭が狭いので、軒先近くにしか菊を植える場所がないことを言う」とある。『菅家文章』「269寄白菊 四十韻」の中に、「小壠斜当戸（小壠斜めに戸に当れり）疎欄正逼軒（疎欄正に軒に逼る）」と類似した句が見える。

○將…①もつて。もちいて。《利用する手段を示す》…をもつて。…によつて。「將布」は「布を用いて」とか「布を使つて」の意。

○貿…①交易する。かえる。あきなう。

『詩經』「衛風・氓」に見える「氓之蚩蚩 抱布貿絲（氓の蚩蚩たる 布を抱きて絲に貿ゆ）」の用例である。

○孀婦…やもめ。夫に死に別れた女。『淮南子』「脩務訓」に

「弔死問疾、以養孤孀。」（注）孀、寡婦也。雒家謂寡婦、曰孀婦」の例が見える。『漢語大詞典』には「寡婦」と説明し、「元稹」『鶯鶯傳』の「適有崔氏

婦、將歸長安」の用例を引く。『白氏文集』²²⁶⁹和最興因報問龜兒」に「西院病婦、後牀孤姪兒」の句が見える。

○要

…『動』①もとめる。(ア)自分のものにしなうと願う。請う。「柳完元」「賀進士王參元失火書」の「足元前要」僕文章古書」の用例がそれである。(漢辭海)

○得

…『助』①文末に用いて強い肯定の語氣を表す。杜甫「草堂即事」の「蜀酒禁得、無錢何処除」の用例が、それである。(漢辭海)

○老僧

…①年老いた僧・老衲。

「王維」「石門精舍詩」に「老僧四五人、逍遙蔭松柏」の句が見える。『漢語大詞典』では、「①年老的和尚」と説明し、「韓愈」「与孟簡尚書書」に「潮州時、有一老僧號大頭、頗聰明、識道理」の用例を引く。川口久雄氏は日本古典文学大系の頭注で次のように記されている。

「種菊」菊の苗を延暦寺の山僧より分けてもらって自宅の園に植えたことは「125題白菊花」などに見えていた。こんどのことも彼の愛菊の癖に出ていることは以前と変わらない。

紀長谷雄の「65白箸翁」に、「有一老僧 謂人云、

去年夏中、頭陀南山 物見昔翁居石室之中」の例が見える。『白氏文集』⁰⁴¹⁴青龍寺早夏」に「閑有老僧立、靜無凡客遇」の句が、又「³⁴³²戲禮經老僧」の詩題が見える。『菅家文章』⁹³奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作」に「菩提道外誰廻向、為念彌陀拜老僧」の句が、又「²⁵⁰別遠上人」に「傳將法界二明火 謝却老僧一老松」の句が見える。

○未曾

…今までにまだ一度もなかつた。

↓ 補説

○元亮

…「陶潜」の字。晉、尋陽柴桑の人。字は或は淵明

(泉明、深明)といい、一に名は元亮に作る。五柳先生と自称し、世に靖節先生と呼ばれた。彭沢県令になつたが八十余日で辞職し、「歸去來辭」を作つた。酒と菊を愛し、田園生活の実感を詩にえがいた。後世の文学に与えた影響は大きい。(『新字源』(陶潜)『白氏文集』³¹⁷⁰哭崔二十四常侍」に「伯倫常置隨身鍾、元亮田園醉裏歸」の句が、又「³²³⁰將歸渭村先寄舍弟」に「子平嫁娶貧中軍、元亮田園醉裏歸」の句が見える。『菅家文章』には、「²⁶⁹寄白菊、四十韻」に「笑殺陶元亮、浪資楚屈原」の句が、又、「⁴³⁸賦新煙催柳色、應製」に「幾千里外思元亮、何一城頭

望武昌」の句が見える。

○花時

…花の咲く時節。花期。花候。「元稹」の「湘南登臨湘樓」詩に「高處望瀟湘、花時萬井香」の用例が見える。『漢語大詞典』では、「①百花盛開の時節。常指春日」と説明し、「杜甫」の「遺遇」詩の「自善遂生理、花時甘縵袍」の用例を引く。『田氏家集』には、「173暮春花下、奉謝諸客勸酒見賀仲平及第」に「吾家不是登龍種、何○花時雲雨園」の句が、又「183和文十三春夜寤 次韻」に「惆悵花時多不快、何當得意穩眠床」の句が見える。『菅家文草』には「68書斎雨日、獨對梅花」に「點檢窓頭數箇梅、花時不記幾年開」の句が見える。

○世尊

…主としてサンスクリット語 bhagavat の漢訳語で、bhaga (幸運、繁榮) と vat (〜を有するもの) の結合したもの。〈婆伽婆〉(薄伽梵) などと音写される。福德ある者、聖なる者の意味で、古代インドでは師に対する呼びかけの言葉として用いられていた。仏教においては釈尊を意味する語として用いられたが、人格化されるに伴い、仏の尊称となり、万徳を具し世に尊敬されるが故にこのように漢訳された。(『岩波仏教辞典』 四八七頁)

「紀長谷雄」の「59醍醐天皇奉答法皇綰停尊號書」に「世尊猶有十號、上皇遂無一累、實封不受、虛稱何勞」の例が見える。

○不計

…「計」は、計算する。転じて見積もりをしてはかる。計画する(『新字源』)
ここでは「不計」で推測することができない。予想することができない、の意。

○悲愁

…悲しみうれえる。『列子』「湯問」に「一里老幼、悲愁、垂涕、相對之日不食」の例が見える。『漢語大詞典』には「悲愁憂愁」と説明し、『楚辭』「九辨」の「離芳藹之方壯兮、余萎約西悲愁」の用例、及び『漢書』「西域傳下 烏孫國」の「昆莫年老、語言不通、公主悲愁」の用例を引く。

『白氏文集』「397答夢得秋日書懷見寄」に「悲愁緣欲老、老過却無悲」の句が、「347早入皇城、贈王留守僕射」に「城柳宮槐護搖落、悲愁不到貴人心」の句が見える。『菅家後集』「509燈滅二絶」に「遷客悲愁陰夜倍、冥冥理欲訴冥冥」の句がある。

○堆沙

…砂をうず高くもる。又うず高くもった砂。「孔平仲」の「至城東作詩」に「茅岡風卷燒、土井雨堆沙」の

例が見える。

○壇 ……①壇。土を高く盛りあげて築いた所〔大漢語林〕

〔刊本〕等に見られる異字「堰」は「土を積んで水をせき止めるしかけ」の意。

補説

菅原道真が菊花を愛好した事は今更論するまでもないが、この太宰府時代の『菅家後集』の作品群でも「505秋晚題白菊」については拙稿³で既に注釈を施し、とりわけ二句目の「残菊」についての考察を試みた。一方「512九月盡」についても拙稿³で注釈を施し、四句目の「黄菊残花」について考察を試みた。今回取り挙げた「種菊」には次に挙げる、讃岐国守時代、京都の自邸に咲いているであろう菊花を思いやつて詠じた「269寄白菊 四十韻」⁵との詩句の類似点が多く見受けられる。

(1) 一・二句目「青膚小葉白牙根、茅屋前頭近逼軒」の表現について

「269寄白菊 四十韻」の十五・十六句目の「早春新賦葉（早春の賦葉新なり）」「初夏細牙根（初夏 牙根細し）」の表現と、「497種菊」の一句目「青膚小葉白牙根」の表現に類似性を指摘できる。又、「269寄白菊 四十韻」の五・六句目「小堰斜當戸（小堰斜めに戸に当れり）」「疎欄正逼軒（疎欄 正に軒に逼

る）」の表現と「497種菊」の二句目「茅屋前頭近逼軒」の表現に類似性を指摘出来る。

(2) 四句目「與書要得老僧園」について

類似表現として「269寄白菊 四十韻」の十一・十二句目に「苗従台嶺得（苗は台嶺より得つ）」「種在侍郎存（種は侍郎に在りて存しき）」が挙げられる。この二句目について道真自らの注が付されている。「予為 吏部侍郎之日、天台明公、寄是花種（予れ、吏部侍郎たりし日、天台の明公、是の花の種を寄せたまひき）。つまり京都の自宅の白菊は、天台僧の明上人より分けてもらった事由を記す。この事情は「菅家文章」125題白菊花」に詠まれている「本是天台山上種（本はこれ天台山上の種）」「今為吏部侍郎花（今は吏部侍郎の花なり）」（125題白菊花）三・四句）及び詩題の傍注「去春、天台明上人、分寄種苗（去春、天台の明上人、種苗を分かち寄せたまひぬ）」を踏まえたものである。（傍線筆者）

道真が、僧より菊花の苗を請い求めた事例は、この詩等以外に、讃岐国主時代の「288官舎前播菊苗」の三・四句に「去歳占黄移野種（去歳は黄なるを占め野種を移す）」「此春問白乞僧家（此の春は白きを問ひて僧家に乞ふ）」の句が見える。波戸岡旭氏は、最近の著⁶で、この詩を引かれ「これに拠ると、昨年も菊を植えてみたけど、興を覚えなかつたようで、そこで今年は、以前都の自邸に植えた白菊の前例を模して、比叡山ならぬ

讃岐の寺院から苗を貰い受けて植え、その清浄感を愛でようとしたのである。しかし、こころを込めて育ててみるのだが、その菊の花咲く重陽の日にも、宮中の宴とはほど遠い南国の官舎での小宴は、ますます悲しく、せつかくの菊も砂を噛むようなあじまない思いで見るとのみであった」と解説されている。(『第二編 菅原道真と雪月花』二七三―二七四頁)。(傍線筆者)

おそらく、この太宰府の地においても、道真の菊花への愛好は衰えず、近くの寺院の僧や知人から、菊花の苗を捜し求めた事情が浮びあがる。

(3) 五句目「未曾種處思元亮」について

語釈の頁でも触れたが、この句の「元亮」は陶潜の事が、陶潜が菊を愛し、多くの詩を残したものが、日本の文人に多大の影響を与えたことは、周知の事だが、とりわけ当時の文人の口上に挙がった詩として次の「飲酒詩(其五)」を指摘するの

○飲酒詩(其五)

陶潜

結廬在人境 人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しさを無し

問君何能爾 君に問う 何して能く爾るか

心遠地自偏 心遠ざかり 地自ら偏ればなり

采菊東籬下 菊を采る 東籬の下

悠然見南山 悠然として 南山を見る

山氣日夕佳 山氣 日夕に佳しく
飛鳥相與還 飛ぶ鳥 相與て還る
此中有真意 此の中にこそ 真意あれ
欲辨已忘言 辨べんと欲して已に言を忘る

『陶淵明詩譯注』 斯波六郎著 二七一―二七三頁)
この詩に象徴されるような、自然と一体化した陶潜の詩情、風流を、「いまだに曾って…思はず」と否定しているこの句の意味は、いかなることを意図しているのであろうか。

小島憲之・山本登朗著『日本漢詩人選集Ⅰ 菅原道真』には、この詩の注釈として次のような一文がある。

「ここに菊を植えるにあたってわたしは、悠々自適の生活の中で菊を愛したかの陶淵明のことなど一度も考えなかった。これは、花の咲く季節に仏にお供えしようと思つてのことなのだ」――「未曾」は、まだ一度もしてないの意。ここは流瀆以前の過去のこと含まず、この謫居に菊を植えるにあたっては、まだ一度もしてない、と言う。(中略) かつて京の自邸の菊花を詠んだ「寄白菊 四十韻」の中で道真是「笑殺す陶元亮、食は貧く楚の屈原」(この美しさに比べれば、陶淵明の菊花など問題にならない…)と述べ、自邸の菊を陶淵明のものに比べて誇つていた。しかしながら、今はそんな考えはない、と一句は言う。(二五九―一六〇頁)

筆者には、右の解釈はやや無理があるように思える。とりわけ「ここは流謫以前の過去のことは含まず、この謫居に菊を植えるにあたっては、まだ一度も〜していない、と言う。」の一文の解釈には肯首できない。(傍線筆者)

ここは、やはり既に指摘されているように、「269寄白菊 四十韻」の三十三・四句「笑殺陶元亮(笑殺す 陶元亮)」「浪資楚屈原(浪は資く、楚の屈原)」を踏まえたそれであると考える。この詩に多くの措辞を求めていることは、前述の通りである。ここでも、「白菊を京の自邸に植え、それを愛でる心情は、陶淵明のそれとは問題にならない。(かの陶淵明など念頭にない)」と詠む。それを踏まえて、今回の太宰府の謫居で詠む一句にも「今まで一度も陶淵明のことなど考えることなく(殊更、陶淵明を意識したからではなく)」のような意の裏に、「かつて讃岐時代に京都の自宅に咲く白菊を思つて詩を詠み、その中で陶淵明の菊を賞する姿勢と、自分のそれとに距離を置いたが、今住む、この太宰の地で詠む、菊に対する心情も、陶淵明のそれとは大きく隔たっていることを改めて実感する」と今の心情を、吐露しているのではあるまいか。つまり、「私は、以前、讃岐のときにも菊を愛でる心情が、陶潜とは違うと述べたことがあるが、今太宰府の地で菊に接していると、ますますこの意を強くする」との真情を、「未曾…思元亮」の表現に込めたいと考える。(傍線筆者)

なお、この詩句二句「未曾種處思元亮、爲是花時供世尊」は、「和漢朗詩集」「秋 前栽」の項に、次のように載る。

曾て種うる処に元亮を思ふに非ず

是れ花の時に世尊に供へんが爲なり

曾非種處思元亮

爲是花時供世尊

菅

(『日本古典文学全集 和漢朗詠集』菅野禮行校注・訳)

菅野禮行氏の頭注には「曾非」は「後集」「未曾」に作る。いま底本並びに諸本に従うが、存疑とある。続けて菅野氏は、この句の解釈及び注を以下のように載せる。

298 これまでに私は菊を植える時、菊を愛した陶淵明のことを思い、その風流を慕つて植えるというわけではなかった。それはほかでもない。菊の花が咲く時にはそれを摘んで仏に添えようとすためだ。菅原道真

菅原道真が太宰府に左遷されて、失意の中に詠んだもの。原詩ではこのすぐ後に、自分は悲しみのあまり、いつ死ぬかわからないと続ける。従つてこの聯は、自らの死への用意を吐露したものと言える。陶淵明の風流さえもなまぬるく思われる極限の心境である。時に作者五十八歳(延喜二年 九〇二)、この翌年二月、道真は配所に没した。

(右掲書)(一六二頁)

(4) 八句目「堆沙作壘荻編垣」の表現について

類似表現として「269寄白菊 四十韻」の五・六句「小堰斜当戸(小堰斜めに戸に当れり)」「疎欄正逼軒(疎欄正に軒に逼る)」及び七十三句「有處堆沙活(處に有りて 沙を堆くして挿す)」を指摘することが出来る。

◎以上、「497種菊」における、「269寄白菊 四十韻」との語句の類似点、つまり措辞の観点から考察してみて来た。そこから見てきたものは、道真が太宰の地でこの「497種菊」を詠む時、かつて讃岐時代に詠んだ「269寄白菊 四十韻」を念頭に置いていたであろうことである。それでは、この二詩の根底に流れる詩情という視点に目を移すと、当然のことながら、道真の置かれていた状況がいずれも余儀なくして京都から隔絶されているという点では共通しているとは言え、その社会的状況、それに加えて年齢から来る肉体的、精神的状況が全く異なる為、両詩の根底に流れる詩情には大きな懸隔がある。

換言するならば、自分の未来への希望を全く絶たれ、死後の世界にそれを希求するしか術のない絶望からくる人生への諦念が、後者の「497種菊」には流れているように思えてならない。叫びの声を失くした深い悲しみが詩句の一つ一つに込められている。ここが「269寄白菊 四十韻」には見られない大きな差異である。

こうした詩情の相違を考える時、筆者に想起する別の作品が

ある。それは、親が愛する子供を亡くした時に詠んだ詩『菅家文章』「117夢阿満」(道真三十九歳時)の根底に流れる詩情と『菅家後集』「503秋夜」の根底に流れる詩情との差異である。

「503秋夜」については既に拙稿^①で試読を施したので詳細は省くが、筆者には道真の三十九歳の時に詠んだ愛する我が息子「阿満」を悼む、絶叫とも言える子を失った親の悲しみを歌いあげた名品と、晩年の太宰府で読んだ「503秋夜」の中でのわが子を失った悲しみ、それを「早雁寒菴聞一種(早雁 寒菴聞くに一種)」「唯無童子讀書聲(唯、童子の書を読む聲無し)」「(秋の到来を告げる早雁の声を聞いた時も、秋の深まりを知らされる寒菴の声を耳にした時も、その泣き声は例年のそれとも少しも変わるものではなかった。(なのに)今年秋だけは幼なかつた我が子の書物を読む声が聞かれない(ことが、たまらなくつらい)」と詠む道真の心境を比すれば後者の詩に子を亡くした親の悲しみを絶叫する気力すら失せ、自らの命も風前の灯のように消滅しかけている悲愴な状況を、敢えて、そこに私情を込めることなく、逆にそれらを全て切り捨て、事象のみで表現しようとする所に一層の悲しみの深化、深刻さを見る思いがする。そうした道真の詠歌姿勢の先例をなす作品としてこの「497種菊」を考えてみたい。

視点は、やや異なるが、道真のこの「497種菊」の詩情に、他の彼の作品と異なる注視すべきものがあることを指摘された一

文が、既に、大曾根章介氏より公にされている。以下該当部分と思われる箇所を引用してみる。³⁾

【菅家後集】を繙くと、どの作品にも真情が紙面に横溢しており、感興の起こるままに詩を賦すという古来の詩道を実践したものであることは誰もが認めるであろう。当時の一般の詩が語句の彫琢修飾に腐心したものに覆われているが故に、道真によって初めて借物でない日本人の詩が誕生したといつて過言ではなからう。だが道真の偉大さはそれで終わるものではなく、新しい詩境を切り拓いた点に求められないであらうか。「種菊」と題する律詩を取上げてみたい。(中略)青い膚をした菊の小さな葉と白い牙の根を配所の茅屋の軒近くに移植した。これは布と物々交換で民家の寡婦の家から分けて貰ったもの、手紙を書いて老僧の園から求めたものだ。菊を植えるのは陶淵明に倣ったのではなく、花が咲いたら仏様にお供えしようと思つたからだ。悲しみ愁う己は何時死ぬか分らないが、土砂を高くし溝を掘り萩の枝で垣根を編んだ。先ず菊の苗の描写から移植の場所を詠み、次いで手に入れた経緯と求めた理由を述べ、死期の近いことをしりながらも移植の様子を淡々と賦している。配所における日常生活の一齣を詠んだものだが、他の詩に見られる悲壮感殆ど影を潜めている。初句に見られる観察の細かさ、結句における作業の叙述の確かさは注目されよう。作者の身辺の対象を取上げて実景を賦し、実感をありのままに述べる姿勢は他に見られ

ないものであり、そこから読者が受取る新鮮な感覚と平明な描写は絶賛に価するであろう。(前著 六十三―六十四頁)

【注】

(1) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十二)―」

〔国語国文学研究〕第四十号 熊本大学国語国文学会

(2) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(一)―」

〔国語国文学研究〕第三十六号 熊本大学国語国文学会

(3) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(四)―」

〔有明工業高等専門学校紀要〕第三十八号

(4) 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈(十一)―」

〔有明工業高等専門学校紀要〕第四十一号

(5) ……269 寄「白菊」四十韻。

遠隔蒼波路 遠く隔つ 蒼波の路

遙思白菊園 遙に思ふ 白菊の園

東京蝸舍宅 東の京なる蝸舎の宅

西向雀羅門 西のかたに向ふ雀羅の門

小壙斜當戸 小壙 斜に戸に當れり

疎欄正逼軒 疎欄 正に軒に逼る

無池蓮本缺 池なければ蓮 本より缺く

有畝竹逾繁 畝有りて竹 逾繁し

擬攬孤叢美 孤つゝの叢の美しさを攬にせむと擬

先芸庶草蕃
先づ庶の草の蕃きを去れり

苗従台嶺得
苗は台嶺より得つ

種在侍郎存
種は侍郎に在りて存しき

予爲吏部侍郎
予れ吏部侍郎たりし日、天台

郎之日、天
の明公、是の花の種を寄せた

台明公、寄
まひき。

是花種。

下手分移通
手を下して分ち移すこと通し

中心愛護敦
中心に愛護すること敦し

早春新膩葉
早春 膩葉新なり

初夏細牙根
初夏 牙根細し

待灌占依井
灌ぐことを待ちて 井に依りて占む

承湯免戴盆
湯ふことを承けて 盆を戴くことを免れたり

藥期揚酷烈
薬は酷烈を揚げむことを期す

莖約引婢媿
莖は婢媿を引かむことを約す

爽頼吹灰到
爽頼は灰を吹きて到る

流年轉殺奔
流年は殺を轉して奔る

乍看珠顆拆
乍らにみる 珠なす顆の折くことを

爭賞素窠翻
争ひて賞つ 素き窠の翻ることを

蟬翅迷施粉
蟬の翅の 粉を施せしかと迷ふ

蜂鑽鬧著痕
蜂の鑽の 痕を著くるに鬧し

地疑星隕宋
地は星の宋に隕ちたるかと疑ふ

庭似雪封衰
庭は雪の衰を封じたるが似し

紫襲衣藏篋
紫を襲ねて 衣い篋に藏む

香浮酒滿罇
香を浮べて 酒を罇に滿てる

仙家嫌葱圃
仙家も葱圃を嫌ふ

隱士厭桃源
隱士も桃源を厭ふ

笑殺陶元亮
笑ひ殺す 陶元亮

冷資楚屈原
資は資く 楚の屈原

和光宜月露
光を和ぐるは月露に宜し

同類是蘭蕙
類を同じくするはこれ蘭蕙

色惜哀虛室
色を惜みて虚室に哀し

名後要盛昆
名に後れて盛昆を要す

懸竿會獻主
懸つらくは竿を會主に獻りしこと

悔劍只貽孫
悔ゆらくは 劍をただ孫にのみ貽さむこと

任老休炊桂
老いたる任に 桂を炊がむことを休めむ

忘憂帶帶萱
憂へを忘れむとて 萱を帶ぶることを倍さむ

芬芳應佩服
芬芳 佩服すべし

貞潔攀援援
貞潔 攀援せむことを欲りす

四序環無腸
四序 環りて賜ふことなし

千秋矢不謬
千秋 矢はくは謬れじ

生涯雖量測
生涯は量り測るとも

祿命未平反
祿命は平反ならず

面目歡娛少
面目 歡ひ娛しむこと少らなり

風塵悶亂煩
風塵 悶へ亂ること煩し

業抛羊柱筆

業は羊柱の筆を抛つ

官建準旗幟

官は準旗の幟を建つ

失道人皆讓

道を失ひて人みな讓す

安身我獨論

身を安むじて 我れ獨り論ぜまくのみ

雙龜收北關

雙龜 北關に收む

五馬屬南轅

五馬 南轅に屬す

文選云、別

文選に云はく、「子が雙

子雙龜、李

龜を別く」と。李氏が謂

氏謂、熊二

はく、「二官を熊むるな

官也。余、

り」といへり。余、刺史

及爲刺史、

たるに及びて、兩つの印

解却兩印、

を解却せり、故に云ふ。

故云也。

鬱鬱として江雲泉

鬱鬱として江雲泉し

濛濛澗雨溫

濛濛として澗雨溫なり

行程過綠浦

行程 綠なる浦を過ぐ

逆旅 青き積に臥す

逆旅 青き積に臥す

水國親賓絶

水國 親賓絶ゆ

漁津商賈喧

漁津 商賈喧し

一來疲涕泗

一來び來りてより 涕泗に疲せたり

三度變寒暄

三度 寒暄を變へぬ

想像霜華發

霜華の發かむことを想像る

悲傷晚節昏

晚節の昏きことを悲しむ

合情排客館

情を含みて客館を排けり

抱影立荒村

影を抱きて荒村に立てり

悵望將穿眼

悵びて望めば眼を穿たむとす

追尋且送魂

追ひて尋めれば魂を送るに且なむとす

意驚由過雁

意の驚くことは 過ぎゆく雁に由る

腸斷豈聞猿

腸の斷つことは 豈猿を聞かめや

有處堆沙插

處に有ひて 沙を堆くして插す

何人折柳攀

何なる人か柳を折りて攀かむ

自開還自落

自からに開きまた自らに落つ

誰見也誰言

誰か見またか言はむ

暮景愁難散

暮の景にも愁へは散じ難し

涼風恨易吞

涼なる風にも恨みは呑み易し

寄詩花盛否

詩を寄す 花は盛りなりや否や

珍重可知恩

珍重たり 恩みを知るべし

(句中の傍線は、筆者)

(6) 『官廷詩人 菅原道真―「菅家文章」―「菅家後集」の世界―

波戸岡 旭 著 (笠間書院)

(7) 拙稿「菅原道真研究―「菅家後集」全注釈 (九)―

(「国語国文学研究」第三十九号) 熊本大学国語国文学会

(8) 『大曾根章介 日本漢文学論集』 第二卷 (汲古書院)

【追記】

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大の御助力をいただいた。とりわけ、語釈、『白氏文集』の詩語の検索などにお力添えを頂いた事に感謝申し上げる。

又、台湾元智工學院の中国古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀 (BIG5)」(<http://ds.admin.yzu.edu.tw/>)の「全唐詩」の項、及び北京大學中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文檢索系統 (UTF-8)」(<http://chinese.pkucn/cg:bin/tanglibrary.exe>)を詩語檢索のために利用した。

(平成十七(二〇〇五)年十一月二十三日執筆了)
(やきやま ひろし／大学院第七回修了・有明高専)